

腹腔内に形成される肉芽腫について

腹腔内特に脂肪織に重度の炎症を起し、周囲臓器や組織の癒着や肉芽腫形成を引き起こす疾患が増えています。皮下や腹腔内の脂肪織炎、肉芽腫性胃炎などが多発するミニチュア・ダックスフント[®]に多いことから、これらの疾患も含んで免疫学的異常や遺伝的素因、体質などが原因と考えられています。

この肉芽腫は、動物の苦しみや痛みも強く、広範囲に拡大する例が多く、炎症や癒着を多臓器や組織に引き起こし、生命に関わることの多い疾患であり、放置されたり誤診されてしまうと予後不良あるいは死の転帰を迎えるため、最大限の注意が必要です。

○症状：元気・食欲廃絶、著明な疼痛や違和感、発熱、嘔吐・下痢、重度の感染症
免疫異常

○診断：症状や既往・体質から推測、触診、
血液検査、CRP 測定、X 線検査、超音波検査 など

○治療：副腎皮質ステロイド[®]や免疫抑制剤による消炎および免疫抑制
免疫調整～サプリメント、免疫治療など
抗生物質投与
内科疾患での完治は不可能～外科手術

○予後：早期発見の外科手術により完治可能
完全摘出や癒着の剥離が技術的に不可能なケースもある
ただし、内科治療の継続による予防が必要になる可能性あり
再発の可能性あり

また、外科手術を行った結果、数か月から数年後にこの肉芽腫を発症する例も多いことから、上記の生体側の素因だけでなく外科手術が大きな原因の1つではないかと考えられています。外科手術は、組織や臓器の炎症や損傷、癒着を少なからず引き起こすため、これらが刺激になることも多く、他にも腹部臓器の空気暴露、全身麻酔、血流の変化なども関与しているはずで、また、外科手術に使用される医療器材である縫合糸が、これらの肉芽腫を惹起する一因であると示唆される報告や経験も多くなっています。

ただし、これらの原因の解析はいまだ進んでおらず、何が原因であるか未だ特定できていない状況を鑑みると、生体側の素因と外科手術の影響の両側面を考えながら、最大限の

予防法～生体側の素因の予測や精査による管理、外科手術手技の徹底や縫合糸の適切な選択など～を試みるべきですが、もし防ぎきれない場合も、これらの疾患を念頭に置きながら診療を行うことで、早期発見や早期治療を行うことが可能となります。

特に、典型的な例として、絹糸を使用している手術例で圧倒的な肉芽腫発症例が多く、さらに病理組織検査にて縫合糸が肉芽腫の内部から見つまっているため、組織反応性の高い多繊維性非吸収性縫合糸が肉芽腫を作ることは断定されています。ただし、この縫合糸だけが原因とは考えられない事例も多く存在しているため、今後も徹底した検証や考察が必要です。

- ・ 絹糸が原因；組織反応性？多繊維？自然素材？易感染性？
- ・ 多繊維性ナイロンが原因；コーティングの損傷？多繊維？易感染性？
- ・ 絹糸の使用が主流であった時代になぜ少なかったか；絹糸が原因ではない？認識不足？
- ・ 組織反応性の低い合成非吸収糸でも発症～長期遺残のため？
- ・ 合成吸収糸は、一時的に組織反応性が高いが、発症例は少ない～短期だから？
遺残しないから？
- ・ 組織反応性のないワイヤークリップでも発症～縫合糸は関係なし？外科手術が原因？
他の原因が主因？
- ・ これらの器材未使用例でも発症～縫合糸は関係なし？外科手術が原因？
他の原因が主因？
- ・ 病理組織検査や肉眼所見で縫合糸が認められない～縫合糸は関係なし？
外科手術が原因？
他の原因が主因？

中には、「縫合糸関連性肉芽腫」と断定する獣医師や報告も多くなってきていますが、実際には上記の事実を解明しない限り、こうと断定するにはあまりにも早合点であり、早計だと思われます。また、これらの誤った周知は、さらに混乱や誤診を招くため、事実を積極的にアウンスする必要があります。